

高知・高知城伝下屋敷跡

1 所在地 高知市丸の内一丁目

2 調査期間 二〇〇一年(平13)四月～七月

3 発掘機関 高知県文化財団埋蔵文化財センター

4 調査担当者 大野佳代子・池澤俊幸・今田 充・久家隆芳

5 遺跡の種類 城下町跡

6 遺跡の年代 古墳時代初期、古代～近代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は高知城内堀の南西隅外側に位置する。当地に存在した施設名を知ることのできる同時代史料は存在しないが、『皆山集』な

ど後世の史料によれば、近世の前期及び後期には藩主山内氏に関連する施設が置かれたといわれる。

調査では、中世末から近代に至る多様な遺構・遺物が検出されたが、近世段階の遺跡の性格に関わるものとしては、近世前期に廃絶



(高知)

した素掘りの堀、「松平土佐守」の名が見える木簡、山内氏の家紋である三ツ葉柏紋の軒丸瓦が目される。その他、上質の部材を使用した井戸や、建物に関わるとみられる石列、埋桶、瓦溜め、廃棄土坑などが検出され、土坑からは陶磁器や木屑などとともに焼塩壺、漆器、調度、下駄、木簡、遊戯具など多様な遺物が出土した。なお、当地は明治八年に高知裁判所となり、一八九六年や一九六二年に新築の記録があるが、それらの遺構も検出した。

木簡は六つの遺構から計四八点が出土している。土坑状遺構SX二は調査区西北部の堀一内で検出され、幅約一・八m深さ約〇・九mをはかる。堀埋没後に掘られた廃棄土坑か堀埋没時に集中廃棄された跡と考えられる。陶磁器類から一七世紀後半に廃絶年代の上限が求められる。(1)～(3)の三点が出土した。土坑状遺構SX九は調査区東部で検出した。近世前期の遺物と共に近世後期の遺物が少量出土している。(4)(5)など三点が出土した。廃棄土坑SX一は調査区北部で検出した。大部分は破壊されており、深さは約二・六mを測る。(6)が出土した。廃棄土坑SX一三は調査区の東端で検出した。後世の破壊により平面形は不明であるが、幅三・七m程度と推定することもできる。深さは約一mである。(7)～(14)の八点が出土した。廃棄土坑SX一五は、調査区内で東端に突出した〇区で検出した。平面規模は不明であるが、長軸四mを越えるものと思われる。出土遺物の量・種類共に特に豊富である。(15)～(20)など一五点が出土した。

遺物からみた廃絶年代の上限は、SX一三が一九世紀前半、SX一五は幕末から近代初期に比定される。井戸一は東部中央で検出し、現状で内径約〇・八m深さ一・九mを測る。一二枚の板材からなる縦板組の井戸枠をとまう。⁽²⁷⁾は枠材の一点である。その他の枠材のうち二〇点にも墨書があり、「下〆五」と判読される。

また、本遺跡では陶磁器にも墨書のあるものが多く、SX一三で「□□〔賄方カ〕」、「東 休息所 □」、「西裏 休息所」、他の近世後期から近代初期の遺構や包含層で「南」、「□賄」、「歳霜」、そのほか釈読不能の文字が、食器・貯蔵具・紅皿などに墨書されており、当地に存在した施設の性格について示唆を与える。

ここでは、残りの良いものや釈読がある程度可能な木簡を掲載する。

8 木簡の釈文・内容

SX〇二

(1) ・「 〇 拾八番

松平土佐守様御用讃岐や

兵助」

・
□
□

四斗入り□かけ

〇

172×45×9 011

(2) ・「>□」

・「>□□」

176×34×5 032

(3) ・「○□」〔刻印〕

・「○□」〔刻印〕

69×48×10 021

SX九

(4) 「□八」〔長カ〕 六兵衛 勘兵衛」

144×70×13 011

(5) 「>寅弥太」

184×62×14 065

SX二一

(6) ・「>□四郎」〔吉カ〕

・「>北□ 四斗計」

128×30×7 032

SX一三

(7) ・「□下女 〇 壺人」

・「文化八年 未二月改

御□前役場」〔錠カ〕

100×61×17 011

- (8) ・「 \angle □□村助□」
(144)×29×5 039

(9) ・「佐岡村 長吉」
「吉四斗入」
144×28×7 011

(10) ・「 \square 倉 \square 」
「 \square 」
196×57×6 011

(11) ・「 \square 村長」
「 \square 四斗」
(93)×(18)×4 081

(12) ・「御料理方 \square 」
〔 \square 〕
〔 \square 〕
〔 \square 〕
(右側面)
250×50×46 011

(13) 「深川善藏様
行」
径177×厚8 061

(14) ・「 \square 」
「御くら」(刻書)
「 \square 」
径240×厚18 061

S X 一五

(15) ・「 \square 廣吉屋
只平」
「 \square 四〃五百」
115×34×8 011

(16) ・「 \square 夜須村」
「 \square 九衛門」
(127)×30×08 039

(17) 「蓮池村只平」
112×31×6 051

(18) 「 \square 永野
喜作計」
136×30×7 033

(19) ・「 \square 甲原村」
「 \square 吉米四」
(130)×30×9 039

- (20) ・「村□」
 「斗九升」
 109×21×2 051
- (21) ・「御やしき」
 井上雄次郎様 江口庄左衛門
 村野□□郎様川村来吉
 「海上安全」
 130×42×4 011
- (22) □
 □
 □
 (542)×89×19 061
- (23) ・「寶積院」
 □音丸
 寶積×
- (24) ・「草履札」
 「観カ」□音丸
 (刻書)
 116×55×11 011
- (25) ・□三 □

岡田□□様 賀

代代永

338×152×18 061

(26) □

(128)×292×18 045

井戸一

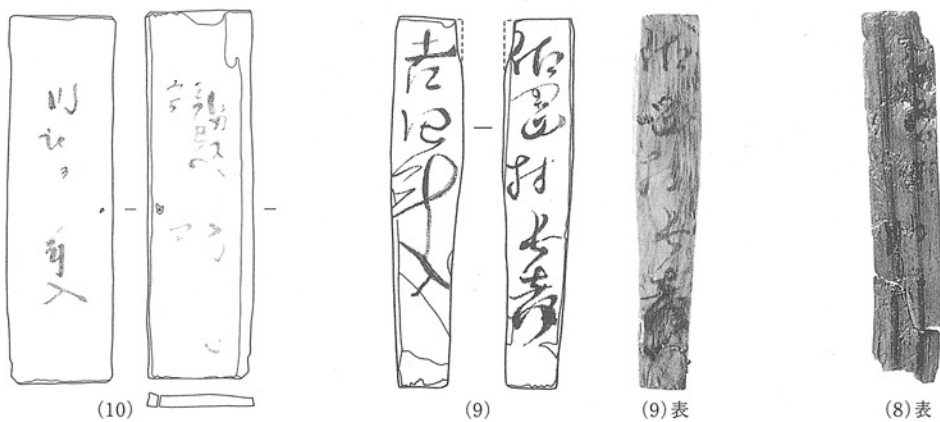
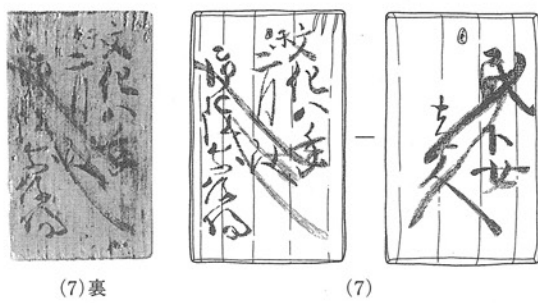
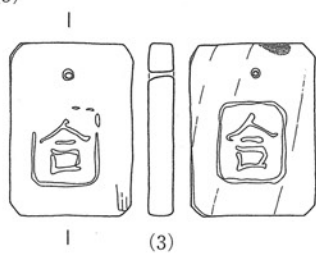
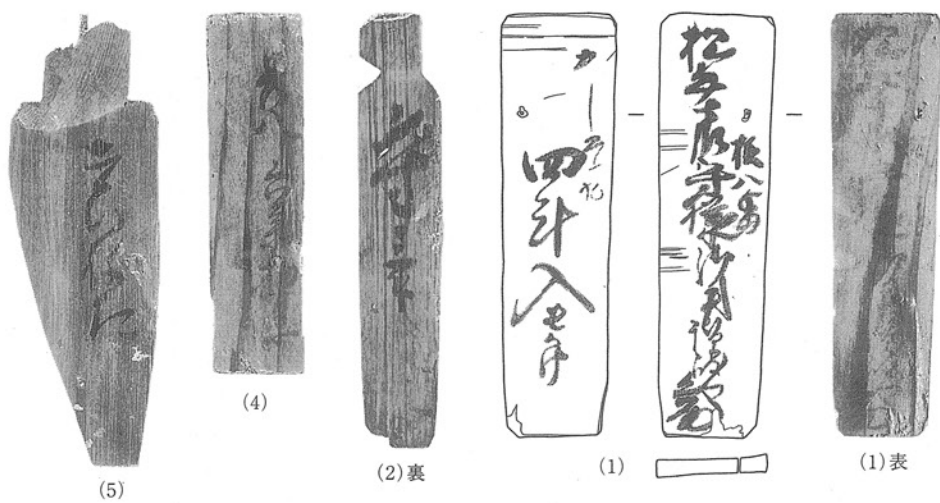
(27) 「下合々五□ノ打□□□□」巻枚 1656×152×46 061

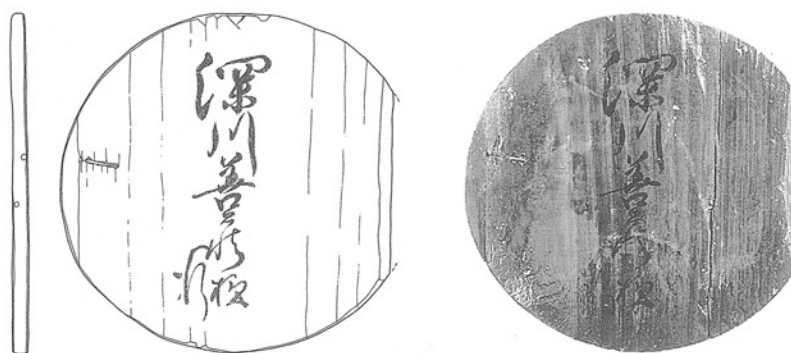
(5)の上端は、一部欠損するが、削られている。

(16)は下端欠損するが、原型は〇三三型式と推定される。

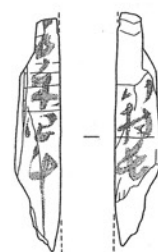
(13)(14)は曲物の底板である。(22)は曲物の側板である。(25)は将棋盤である。

内容について、出土点数が多い近世後期のものからみていくと、まず村名・人名・内容量の項目のすべてあるいは一部を記す一群が存在する。荷札とみられる。形態は先細りの平面形を呈するものと、上部に切込みをもつものに集約され、荷札にはこの二種の形態が想定できる。墨書の部位や内容でみると、SX二、SX一、SX一三では片面に村名・人名あるいは商人名を記し、他面に内容量を記すタイプのみであるが、SX一五では片面に村名と人名のみを記すものと、片面に村名、他面に人名を記すものが加わっている。これは時期差によるか、荷の性格をも含んだ相違であろう。また、記された内容量にも違いがみられ、SX二、SX一、SX一三では確

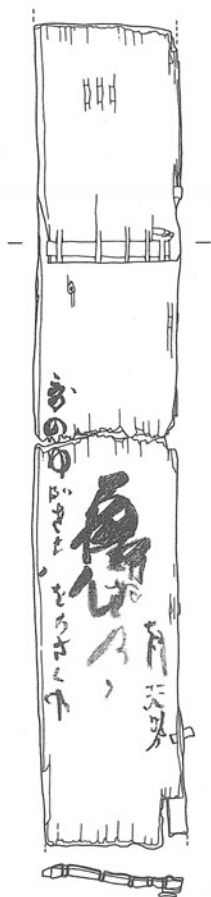




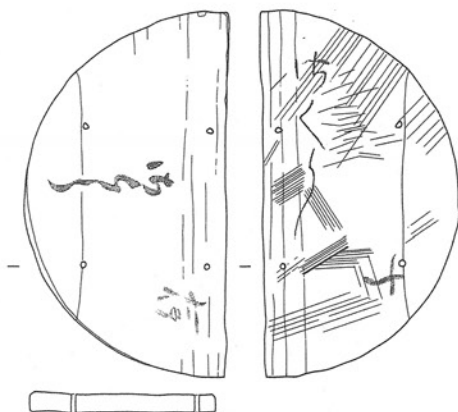
(13)



(11)



(22)



(14)



(16) 表

(15) 裏



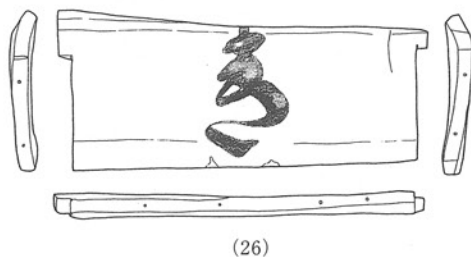
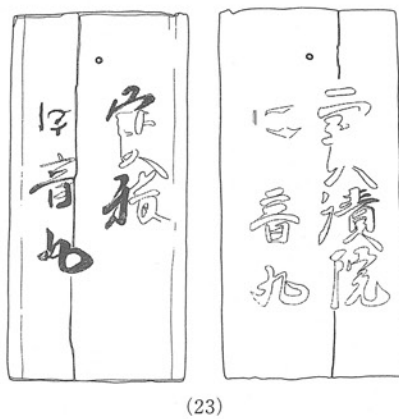
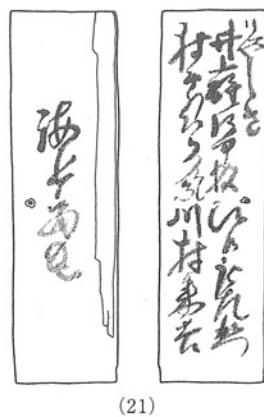
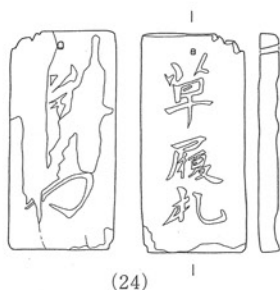
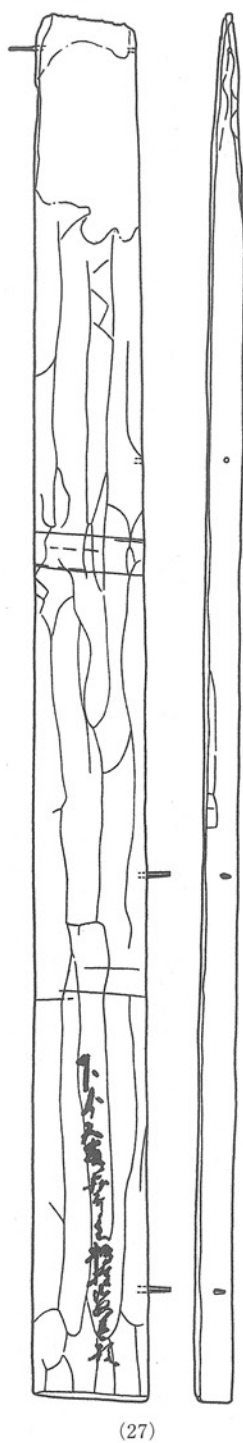
(19)



(18)



(17)



認できる四点がいずれも四斗で、(10)も少なくとも斗単位であるが、SX一五では斗以下の単位が記されている。阿波では五斗が単位となっているとみられる例もあるが(本誌第二号)、この資料群では四斗をひとつの基準と捉えられるとともに、端数に関する相違が認められる。このように本遺跡出土の荷札木簡では、幕末から近代初期に比定されるものとそれ以前のものの比較において、時期差に伴う何らかの理由による表記の内容や方法の差異を指摘できる可能性がある。なお、判読できた村名は高知平野の西縁部や東縁部に所在する。

次に、下方を細くしない平面形で、且つ上端部に穿孔される一群が存在する。両面に同じ内容が記されるものや、刻書されるものがあるほか、内容からも免札あるいはそれに類する機能を想定できるものがある。

以上の文字資料とその他の調査成果を併せてみた場合、本遺跡を営んだ主体と地方知行との関係など、極めて興味深い問題に関する情報を含んでいると言えよう。

なお、釈読は土佐史談会の高橋史朗氏にお願いした。

9 参考文献

高知県文化財埋蔵文化財センター『高知城伝下屋敷跡』(二〇〇二年)

(池澤俊幸)

木簡研究 第二〇号

巻頭言―機器の目・人の目―

一九九七年出土の木簡

和田 萃

概要 平城宮跡 平城京跡(1) 平城京跡(2) 青野遺跡 藤原宮跡 酒船石遺跡 長岡宮跡 長岡京跡左京二条四坊三町 長岡京跡右京六条二坊六町 平安京跡右京三条一坊三町 平等院庭園 細工谷遺跡 大坂城跡 天満本願寺跡 堺環濠都市遺跡 東浅香山遺跡 猪名庄遺跡 屋敷町遺跡 加都遺跡 明石城武家屋敷跡 境谷遺跡 茂利宮の西遺跡 安坂・城の堀遺跡 大將軍遺跡 大脇城跡 瀬名川遺跡 明治大学記念館前遺跡 千駄ヶ谷五丁目遺跡 山崎上ノ南遺跡B地点 西原遺跡 松本城三の丸跡小柳町 松本城下町跡伊勢町 三輪田遺跡 一本柳遺跡 志羅山遺跡 三条遺跡 上高田遺跡 山田遺跡 弘田柵跡 大光寺新城跡遺跡 福井城跡 金石本町遺跡 戸水大西遺跡 堅田B遺跡 七尾城下町遺跡 蛇喰A遺跡 二口五反田遺跡 清水堂F遺跡 下ノ西遺跡 中倉遺跡 大御堂廃寺 三田谷I遺跡 有福寺遺跡 高田遺跡 百間川米田遺跡 津寺遺跡 末原窯跡群(灰原上層) 萩城跡(外堀地区) 高松城跡 観音寺遺跡 上長野A遺跡 香椎B遺跡 博多遺跡群 魚屋町遺跡

一九七七年以前出土の木簡(二〇〇) 藤原宮跡
 釈文の訂正と追加(一) 山垣遺跡 袴狭遺跡(深田地区) 袴狭遺跡
 入佐川遺跡 出雲国庁跡
 再び長屋王家木簡と皇親家令について 八木 充
 長野特別研究集会の記録
 信濃の古代と屋代遺跡群:寺内隆夫、七世紀の屋代木簡:傳田伊史、七世紀の地方木簡:鐘江宏之、七世紀の宮都木簡:鶴見泰寿、律令制の成立と木簡―七世紀の木簡をめぐって:館野和己
 書評 佐藤信著『日本古代の宮都と木簡』 仁藤敦史
 新刊紹介 大庭脩編著『木簡―古代からのメッセージ』 丸山裕美子

頒価 五五〇〇円 送料六〇〇円